香川大学教育実践総合研究（*Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.*），16:133－141，2008

実地教育の側面からみた「未来からの留学生」の意義
—参加の動機づけに関する学生の意識調査から—

岡田知也（音楽教育）・野﨑武司（保健体育教育）・高木由美子（理科教育）・
日野陽子（美術教育）・山田貴志（技術教育）・米村耕平（保健体育教育）・
大久保智生（学校教育）・久保直人（教職実践）・山本木ノ実（教職実践）

760-8522　高松市幸町１－１　香川大学教育学部

A Significance of "Mirai kara no Ryugakusei" for Students' Practical Training : From Investigation of Students' Consciousness about Their Motivation to Participate

Tomoya Okada, Takeshi Nozaki, Yumiko Takagi, Yoko Hino,

Takashi Yamada, Kohei Yonemura, Tomoo Okubo, Naoto Kubo

and Konomi Yamamoto

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要　旨　「未来からの留学生 教育学部フェスティバル in 香大」は休日にキャンパスを開放し，講座に参加する幼児・児童・生徒に，大学という「学び」の場において学習や研究活動を体験してもらう行事である。本行事は主に，「地域貢献」「実地教育」「教員のＦＤ」という３つの目的を掲げて企画・実施している。本小論は，上記３つの目的のうち学部生・大学院生の実地教育という側面において，「未来からの留学生」がどのような役割を果たすことができているのかという点について，彼らがどのような意識をもって関わっているのかという視点からアンケート調査を実施し，分析・考察を行ったものである。

キーワード　地域貢献　実地教育　教員のＦＤ　意識調査　動機づけ

１．はじめに

平成14（2002）年度から現行の学習指導要領が完全実施され，学校は週５日制となっている。その目的は学校，家庭，地域社会の役割を明確にし，それぞれが協力して豊かな社会体験や自然体験等の様々な活動の機会を子ども達に提供することによって，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動する能力，自らを律しつつ他人を思いやる豊かな心やたくましい人間性などの「生きる力」を育むことにある。「未来からの留学生　教育学部フェスティバル in 香大」（以下「未来からの留学生」）は休日にキャンパスを開放し，「未来からの留学生」として講座に参加する幼児・児童・生徒に，大学という「学び」の場において学習や研究活動を体験してもらう行事である。（山神他，2003）

「未来からの留学生」は，第１回を開催した2002年度から一貫して，教員有志により組織された実施専門委員会が企画し，それに基づき学務委員会を通じて各コース・領域から選出された実施委員の協力を得て実施するという体制を

とっている。(注１)

第２回が９月23日に開催されたのを除き，例年10月上旬に開催しており，本年（平成19年）度は10月７日（日）に第６回を開催した。

２．「未来からの留学生」を開催する意義

「未来からの留学生」を教育学部として企画・実施するのは主に以下の３つの理由からである。

第一は地域貢献である。学校が週５日制となり，子どもたちは休日を家庭で，あるいは学習塾に通ったりして過ごすことが多くなると危惧されている。地域に貢献し，地域と共に発展する大学及び学部としては，子どもたちのために，知的に楽しみ，学習する機会を提供していくことが使命であるといえる。教育学部には多様な専門領域の教員がおり，様々な分野での学びの機会を提供することが可能であろう。

第二は教育学部生・大学院生に，子どもたちとの接点を様々な形で持ってほしいという願いからである。学部４年間のカリキュラムを通して，学生にとって最も重要な体験活動であることはいうまでもない「附属学校・園における教育実習」とは異なる，しかし子どもたちと「学び」や「気づき」，「体験」等を通して関わるという本質においては何ら価値の違わない活動として，「未来からの留学生」に関わることが学部生・大学院生にとってかけがえのない財産となるであろうと考えている。

第三は教員のFDに関連して，教育学部の教員が子どもの学びを支援するという視点を共有するためである。教員が専門の研究を活かして，教材開発や教育方法改善へと繋げるためには，子どもたちとの交流が不可欠であろう。子どもたちをキャンパスに招き，講座を担当する。そのことが子どもの学びへの関心を高め，ひいては教育学部の教員としての力量を形成することになると考えている。

また平成15年度より高校生のためのオープンキャンパスを同時に開催している。高校生に教育学部の魅力と活動の一端をアピールするためには「未来からの留学生」は，絶好の機会であるといえるであろう。子どもたちの歓声があふれている教育学部の様子に接し，一人でも多くの高校生が「香川大学教育学部で教員を目指し学んでみたい」と思ってもらうことも目的の一つであるといえる。(岡田，2006)

本小論においては，上記の３つの理由のうち第二の理由，すなわち学部生・大学院生の実地教育という側面において，「未来からの留学生」がどのような役割を果たすことができているのかという点について，学部生・大学院生がどのような意識をもって関わっているのかという視点から調査を実施し，分析・考察を行った。

３．「未来からの留学生」における講座と学部生・大学院生との関わり

山神他（2002）は，第１回開催時に実施したアンケート調査に基づき「学部の授業とリンクさせた，授業の一環として企画立案すること」を以降の「未来からの留学生」に対し提言を行っている。岡田（2005）はその提言に応え，「子どもたちに大学での授業をわかりやすく体験してもらう」ことと「学生・大学院生が授業で履修した内容を，子どもとの共有体験に活かす」ことを両輪とした実践例を報告している。このような，学部における授業内容を応用した実践において，学部生・大学院生の主体的な関わりが重要であることはいうまでもない。

また野崎（2005）は「開講講座数や参加者数に目が行きがちであるが，規模の充実の点においては十分に効果が確認された。(中略）学生の行事への関わりを質的に高めていきたいと考えている」と，「未来からの留学生」が学部生・大学院生の実地教育に関して重要な役割を担っていくことの可能性について言及している。

「未来からの留学生」において，学部生・大学院生の主な関わりの場となるのが，各コース・領域を中心に企画・運営される「講座」である。本年度は，ほぼ全てのコース・領域及び附属教育実践総合センターが講座を開講した。

第１回（平成14年度）から開講された講座数

を列挙すると，第１回は18講座，第２回（同15年度）は36講座，第３回（同16年度）は計44講座，第４回（同17年度）は40講座，第５回（同18年度）は41講座，そして今回が38講座である。開講される講座数は，第１回を除き，40講座前後で推移している。教育学部におけるコース・領域は17，大学院学校教育研究科における専修は13であることを考えると，40前後という講座数は各コース・領域の取り組みがある程度定着している表れといえるのではないだろうか。

そこで38の講座を企画・実施に関して，主体的な役割を担った者が誰であったかという視点により分類すると，教員主体による講座が３講座，教員と学部生・大学院生のコラボレーションによる講座が17講座，学部生・大学院生主体による講座が18講座であった。Table １に見るとおり，第２回以降，回を追う毎に教員と学部生・大学院生等のコラボレーションによる講座及び学部生・大学院生主体による講座の割合が高まっていく傾向を見て取ることができる。

教員と学部生・大学院生等のコラボレーションによる講座及び学部生・大学院生主体による講座の割合が高まっていく傾向は，講座数を見る限り明らかであるが，その内実はどのようなものであろうか。野崎（2006）が「『主体的参加』が重要である」と述べているとおり，教員を志望する学部生・大学院生にとって，自らが主体的動機をもって関わろうとする意識を持つことは欠かすことのできないものなのである。

そこで今回，「未来からの留学生」に関わった学部生・大学院生に，参加することについての自身の意識についてアンケート調査を実施した。調査用紙には，「未来からの留学生」実施日当日，各講座の終了後に回答してもらい回収した。

４．アンケート調査の方法及び結果と考察

（１）方法

１）調査対象者

教育学部１年生14名（男子３名，女子11名），２年生123名（男子42名，女子81名），３年生91名（男子35名，女子56名），４年生30名（男子11名，女子19名），教育学研究科大学院１年生6名（男子１名，女子５名），２年生５名（男子２名，女子３名）の計269名が調査に参加した。

そのうち，回答に不備のなかった教育学部１年生12名（男子３名，女子９名），２年生116名（男子37名，女子79名），３年生78名（男子32名，女子46名），４年生28名（男子９名，女子19名），教育学研究科大学院１年生４名（女子４名），２年生５名（男子２名，女子３名）の計243名を分析対象とした。

２）調査内容

①参加への動機づけ

田中・山内（2001）の打ち込んでいる活動に対する動機づけ尺度をもとに参加への動機づけ尺度を作成した。「『未来からの留学生』に参加して子どもとかかわることの理由についてお尋ねします」という教示の下，『未来からの留学生』に参加して子どもと関わることへの動機づけについて「あてはまらない」（１点）から「あてはまる」（５点）までの５件法で回答してもらった。

②参加による満足感

「『未来からの留学生』に参加して満足しましたか」という教示の下，参加による満足感につ

Table １ 主体的な役割を担った者が誰であったかという視点により分類

	開講された講座	教員主体の講座	コラボレーション講座	学部生・大学院生主体の講座
第１回	18	17	0	1
第２回	36	10	18	8
第３回	44	12	18	14
第４回	40	9	13	18
第５回	41	7	14	20
第６回	38	3	17	18

いて「満足していない」（1点）から「満足している」（5点）までの5件法で回答してもらった。

③別企画への参加意欲

「『未来からの留学生』のような企画があったらまた参加したいですか」という教示の下，別企画への参加意欲について「参加したくない」（1点）から「参加したい」（5点）までの5件法で回答してもらった。

④子どもと関わる自信

「『未来からの留学生』に参加して子どもと関わっていく自信がつきましたか」という教示の下，子どもと関わる自信について「自信はつかなかった」（1点）から「自信がついた」（5点）までの5件法で回答してもらった。

⑤参加による成長の実感

「『未来からの留学生』に参加して成長したと思いますか」という教示の下，参加による成長の実感について「成長しなかった」（1点）から「成長した」（5点）までの5件法で回答してもらった。

⑥子どもや教育への興味・関心

「『未来からの留学生』に参加して子どもや教育への興味や関心が高まりましたか」という教示の下，子どもや教育への興味・関心について「高まらなかった」（1点）から「高まった」（5点）までの5件法で回答してもらった。

（2）結果と考察

1）参加への動機づけについて

参加への動機づけ尺度16項目に対して，因子分析（最尤法，Promax回転）を行った。その結果，3因子12項目が妥当であると考えられた（Table 2）。

第1因子は，「私にとって子どもと関わることは重要だから」「子どもと関わることで新しいことを学びたいから」など，自律性の高い外発的動機づけを表す項目からなっているので，「高自律的外発的動機づけ」と解釈した。第2因子は，「子どもと関わることをしなければ自分を恥ずかしく感じるから」「もし私が子どもと関わることをしなければ問題が生じるから」など，自律性の低い外発的動機づけを表す項目からなっているので，「低自律的外発的動機づけ」と解釈した。第3因子は，「子どもと関わることが好きだから」「子どもと関わることは楽しいから」など，内発的動機づけを表す項目

Table 2　参加への動機づけ尺度の因子分析結果

〈項目〉	因子負荷量 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ　高自律的外発的動機づけ（α =.857）			
私にとって子どもと関わることは重要だから	.801	.008	.030
子どもと関わることで新しいことを学びたいから	.756	−.033	.022
私の価値観では子どもと関わることは大切だから	.750	.092	.092
子どもと関わることが私の将来のためになるから	.748	−.045	−.074
Ⅱ　低自律的外発的動機づけ（α =.853）			
子どもと関わることをしなければ自分を恥ずかしく感じるから	−.026	.785	.062
もし私が子どもと関わることをしなければ問題が生じるから	−.002	−.778	−.130
子どもと関わることをしないと罪悪感を覚えるから	.126	.740	−.025
子どもと関わることをしないと周りの人に怒られるから	−.106	.722	−.016
子どもと関わることで周りの人に評価されたいから	.003	.678	.104
Ⅲ　内発的動機づけ（α =.896）			
子どもと関わることが好きだから	.002	−.029	.935
子どもと関わることは楽しいから	.048	.033	.881
私にとって子どもと関わることはおもしろいから	.162	−.065	.694

因子間相関	Ⅰ	Ⅱ
Ⅱ	−.126	
Ⅲ	.706	−.346

からなっているので，「内発的動機づけ」と解釈した。

尺度の信頼性を検討するため，Cronbachのα係数を算出したところ，第1因子が0.857，第2因子が0.853，第3因子が0.896であった。したがって，内的整合性の観点からの信頼性は十分であることが示された。そして，各因子に含まれる項目の得点の合計を項目数で割り，それぞれ「高自律的外発的動機づけ」得点，「低自律的外発的動機づけ」得点，「内発的動機づけ」得点とした。

参加学生の未来からの留学生参加への動機づけについて検討するため，参加への動機づけ尺度の平均と標準偏差を算出した（Table 3）。

その結果，未来からの留学生に参加した学生は「高自律的外発的動機づけ」得点と「内発的動機づけ」得点の平均が4点台と高く，「低自律的外発的動機づけ」得点の平均が1点台と低かった。したがって，参加した学生は，自律性の高い動機づけに基づいて未来からの留学生に参加していることが明らかとなった。

Table 3　参加学生の参加への動機づけ尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
高自律的外発的動機づけ	4.143	0.862
低自律的外発的動機づけ	1.551	0.761
内発的動機づけ	4.572	0.714

2）未来からの留学生参加による変化について

未来からの留学生参加による変化について検討するため，今回用いた尺度の度数分布と平均および標準偏差を算出した。

その結果，未来からの留学生への「参加による満足感」では，「満足している」と「どちらかというと満足している」と答えている学生が約80％を占め，平均も4.424と高い値となった（Table 4）。

「別企画への参加意欲」では，「参加したい」と「どちらかというと参加したい」と答えている学生がここでも約80％を占め，平均も4.424と高い値となった（Table 5）。

「子どもと関わっていく自信」では，「どちらともいえない」と答えている学生と「どちらかというと自信がついた」と答えている学生が約40％ずつおり，平均も3.658と3より高い値となった（Table 6）。

「参加による成長の実感」では，「どちらかと

Table 4　参加学生の参加による満足感の度数分布と平均値および標準偏差

	満足していない	どちらかというと満足していない	どちらともいえない	どちらかというと満足している	満足している	平均値（標準偏差）
未来からの留学生に参加して満足しましたか	7	9	14	57	156	4.424
	2.9%	3.7%	5.8%	23.5%	64.2%	(0.965)

下段はパーセント

Table 5　参加学生の別企画への参加意欲の度数分布と平均値および標準偏差

	参加したくない	どちらかというと参加したくない	どちらともいえない	どちらかというと参加したい	参加したい	平均値（標準偏差）
未来からの留学生のような企画があったら	2	3	22	79	137	4.424
また参加したいですか	0.8%	1.2%	9.1%	32.5%	56.4%	(0.775)

下段はパーセント

Table 6　参加学生の子どもと関わる自信の度数分布と平均値および標準偏差

	つかなかった	どちらかというとつかなかった	どちらともいえない	どちらかというとついた	ついた	平均値（標準偏差）
未来からの留学生に参加して子どもと	5	7	94	97	40	3.658
関わっていく自信がつきましたか	2.1%	2.9%	38.7%	39.9%	16.5%	(0.859)

下段はパーセント

いうと成長した」と「成長した」と答えている学生が約70％を占め，平均も3.947とほぼ4に近く，高い値となった（Table 7）。

「子どもや教育への興味・関心」では，「どちらかというと高まった」と「高まった」と答えている学生が約70％を占め，平均も4.173と高い値となった（Table 8）。

以上の結果から，参加した学生は企画に満足しており，別の子どもと関わる企画に対しても参加しようと思っており，参加したことによって子どもや教育への興味関心が高まり，自身の成長も実感していることが明らかとなった。このことからも，未来からの留学生は実地教育の企画として意義あるものであることが示されたといえる。

3）性別，学年，参加経験による未来からの留学生への意識の差について

参加学生の未来からの留学生への意識について，性別，学年，参加経験の有無別に詳しく検討する。

性別による参加学生の意識の差について検討するため，性別（男子，女子）を独立変数とし，各尺度を従属変数としたt検定を行った（Table 9）。

その結果，「高自律的外発的動機づけ」得点，「低自律的外発的動機づけ」得点，「内発的動機づけ」得点，「参加による満足感」得点，「別企画への参加意欲」得点，「子どもや教育への興味・関心」得点において有意差が認められた。この結果から，女子のほうが男子よりも参加に対する高自律的外発的動機づけと内発的動機づけが高く，参加による満足感と次回の企画への参加意欲，子どもや教育への興味・関心も高いことが示された。また，男子のほうが女子よりも参加に対する低自律的外発的動機づけが高いことが示された。したがって，女子の方が自律的な動機づけに基づいて未来からの留学生に参

Table 7　参加学生の参加による成長の実感の度数分布と平均値および標準偏差

	成長しなかった	どちらかというと成長しなかった	どちらともいえない	どちらかというと成長した	成長した	平均値（標準偏差）
未来からの留学生に参加して成長しましたか	4	1	64	109	65	3.947
	1.6%	0.4%	26.3%	44.9%	26.7%	(0.834)

下段はパーセント

Table 8　参加学生の子どもや教育への興味・関心の度数分布と平均値および標準偏差

	高まらなかった	どちらかというと高まらなかった	どちらともいえない	どちらかというと高まった	高まった	平均値（標準偏差）
未来からの留学生に参加して子どもや教育への	3	5	46	82	107	4.173
興味や関心が高まりましたか	1.2%	2.1%	18.9%	33.7%	44.0%	(0.892)

下段はパーセント

Table 9　性別による各尺度の平均値とｔ検定の結果

	男子 (N＝83)	女子 (N＝160)	t 値
高自律的外発的動機づけ	3.919 (0.892)	4.259 (0.825)	2.968**
低自律的外発的動機づけ	1.795 (0.918)	1.424 (0.633)	3.700***
内発的動機づけ	4.374 (0.788)	4.675 (0.651)	3.181**
参加による満足感	4.253 (1.022)	4.513 (0.925)	2.000*
別企画への参加意欲	4.217 (0.827)	4.531 (0.726)	3.050**
子どもと関わる自信	3.663 (0.859)	3.656 (0.862)	0.055
参加による成長の実感	3.807 (0.803)	4.019 (0.843)	1.885
子どもや教育への興味・関心	4.000 (0.937)	4.263 (0.858)	2.191*

df＝241　カッコ内は標準偏差　　*p<.05 **p<.01 ***p<.001

加していると考えられる。

学年による参加学生の意識の差について検討するため，学年（1，2年生，3年生以上）を独立変数とし，各尺度を従属変数としたt検定を行った（Table 10）。なお，今回の調査では，1年生の人数と4年生以上の人数が少なかったため，1年生と2年生を1つの群とし，3年生以上を1つの群として分析を行うこととした。

その結果，「参加による満足感」において有意差が認められた。この結果から，1，2年生のほうが3年生以上よりも満足感が高いことが示された。このことは，これまで教育実習などで子どもと関わる経験の多い3年生以上よりも1，2年生は子どもと関わる経験が少ないことからもこうした企画に満足しやすいと考えられる。

昨年度の参加の有無による参加学生の意識の差を検討するため，各尺度を従属変数とし，昨年度の参加の有無（参加経験あり，参加経験無し）を独立変数としたt検定を行った（Table 11）。

その結果，「低自律的外発的動機づけ」において有意差が認められた。この結果から，昨年参加した経験のある学生のほうが低自律的外発的動機づけに基づいて参加していることが示された。昨年度の未来からの留学生に参加したために，今年も仕方なく参加している学生もいると考えられる。

以上の結果から，性別，学年，参加経験の有無によって，いくつかの違いは認められたが，注意しなければならないのは，前述のように全体的には参加学生の未来からの留学生への意識は高いということである。例えば，男子が女子よりも高自律的外発的動機づけと内発的動機づけは高く，低自律的外発的動機づけは低いということも，「敢えて言えば」というカッコつきのものであるということである。したがって，いくつかの違いは認められたが，各尺度の平均

Table 10　学年による各尺度の平均値とｔ検定の結果

	1，2年生 (N＝128)	3年生以上 (N＝115)	t 値
高自律的外発的動機づけ	4.256（0.748）	4.017（0.961）	2.169*
低自律的外発的動機づけ	1.536（0.745）	1.567（0.783）	0.316
内発的動機づけ	4.604（0.684）	4.536（0.746）	0.740
参加による満足感	4.570（0.876）	4.261（1.035）	2.523*
別企画への参加意欲	4.375（0.823）	4.478（0.718）	1.037
子どもと関わる自信	3.664（0.872）	3.652（0.849）	0.107
参加による成長の実感	3.945（0.854）	3.948（0.815）	0.023
子どもや教育への興味・関心	4.219（0.930）	4.122（0.850）	0.846

df＝241　カッコ内は標準偏差　　*p<.05

Table 11　昨年度の参加の有無による各尺度の平均値とｔ検定の結果

	昨年参加 (N＝114)	昨年不参加 (N＝129)	t 値
高自律的外発的動機づけ	4.046（0.869）	4.229（0.850）	1.654
低自律的外発的動機づけ	1.653（0.809）	1.461（0.707）	1.975*
内発的動機づけ	4.594（0.619）	4.553（0.790）	0.442
参加による満足感	4.298（1.064）	4.535（0.857）	1.918
別企画への参加意欲	4.483（0.681）	4.372（0.848）	1.108
子どもと関わる自信	3.693（0.821）	3.628（0.893）	0.588
参加による成長の実感	3.974（0.792）	3.923（0.872）	0.477
子どもや教育への興味・関心	4.193（0.774）	4.155（0.988）	0.330

df＝241　カッコ内は標準偏差　　*p<.05

値を見る限り，全体としては参加学生の未来からの留学生への意識は高いといえる。

4）参加への動機づけが及ぼす影響について

どのような動機づけに基づいて参加すると実地教育として効果があるのかを検討するため，参加への動機づけを説明変数とし，「参加による満足感」，「別企画への参加意欲」，「子どもと関わる自信」，「参加による成長の実感」，「子どもや教育への興味・関心」を目的変数とした重回帰分析を行った（Table 12）。

その結果，参加による満足感に対しては内発的動機づけが影響を及ぼしていた。また，「別企画への参加意欲」，「子どもと関わる自信」，「参加による成長の実感」，「子どもや教育への興味・関心」に対しては，高自律的外発的動機づけと内発的動機づけが影響を及ぼしていた。

以上の結果から，自律性の高い動機づけに基づいて「未来からの留学生」に参加している学生ほど満足し，次回の企画への参加の意欲も高く，子どもとかかわっていく自信を持ち，成長を実感しており，子どもや教育への関心も高まっていることが明らかとなった。したがって，自律的に「未来からの留学生」に参加している学生ほど，実地教育としての効果があると考えられる。

5．おわりに

今回の「未来からの留学生」開催について学務委員会において企画を提示した際，各講座の企画・実施について，特に6項目のお願いをした。そのうち2項目は，学部生・大学院生の実地教育に関わるものであった。

1つめは「香川県の広い地域から参加者が集まっており，繰り返し参加している子どもも多く見受けられる。そのような子どもたちにとって新鮮に感じられるような企画にしてほしい」というものである。教育学部の行事として定着している「未来からの留学生」ではあるが，その魅力が停滞しないように学部生・大学院生の主体的な参加による企画力・実行力を期待したのである。

2つめは「参加する幼児・児童の安全面を再確認する。教育学部内の設備は通常，教職員や学部生・院生等，大人が使用することを前提としている。幼児・児童にとって隠れた危険物・危険箇所がないか，また活動に不都合はないか等を確認し，安全管理を徹底してほしい」というものである。学校・園等の危機管理の一端について，意識や目線を持つことの大切さを，本行事を通して気付いてほしいと願ったからである。

1つめについては，14講座がこれまでにない新しい企画で講座を開講しており，また講座名はこれまでと同じであるが，内容に新たな工夫を加えた講座も多く見受けられた。それらの講座においては，実感として学部生・大学院生が主体的に取り組んでいるように感じられた。

2つめについては，参加された保護者の方から「ちゃんと校舎の外廊下には，転落防止のダンボールを貼ってくれていたりして行き届いています。学生の皆様，お世話になりました。みんなさわやか。とてもいいイベントですね」というコメントをいただいた。学部生・大学院生が高い意識を持って主体的に取り組んだ結果が結実して，このコメントにつながったのであろう。

教育学部における4年間のカリキュラムを通

Table 12　重回帰分析の結果

	参加による満足感	別企画への参加意欲	子どもと関わる自信	参加による成長の実感	子どもや教育への興味・関心
高自律的外発的動機づけ	.130	.196**	.204**	.213**	.222**
低自律的外発的動機づけ	−.033	.037	.032	−.009	.033
内発的動機づけ	.190*	.378***	.248**	.167*	.285***
重相関係数	.308***	.521***	.407***	.349***	.457***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

して，学生にとって最も重要な体験活動はいうまでもなく附属学校・園における教育実習であろう。しかし子どもたちと「学び」や「気づき」，「体験」等を通して関わるという本質においては，何ら価値の違わない活動として「未来からの留学生」に関わることが学部生・大学院生にとってかけがえのない財産となるであろうと考えている。

引用文献

田中希穂・山内弘継（2001）「動機づけがwell-beingにおよぼす影響」『日本心理学会第65回大会発表論文集』, p.548

山神眞一・野﨑武司・岡田知也・小方朋子（2003）「教育学部FDと学生の実地指導を企図した学部-附属連携事業の試み －“未来からの留学生”一日体験入学を通して-」『香川大学教育実践総合研究第６号』，p.25

野崎武司他（2005）「“未来からの留学生” ３年目の取り組み」『未来からの留学生報告書』香川大学教育学部，p.1

岡田知也（2006）「教育学部FDと学生の実地指導を企図した学部-地域連携事業の試み －“未来からの留学生”と音楽教育講座の取り組み-」『日本教育大学協会四国地区研究集会記録集第28集』日本教育大学協会四国地区会，p.5

野﨑武司他（2006）「“未来からの留学生”を担当して」『未来からの留学生報告書』香川大学教育学部，p.1

注

（１）第６回「未来からの留学生」の実施組織は以下の通りである。

〈実施専門委員会〉

岡田知也（委員長），野﨑武司（副委員長），高木由美子，日野陽子，山田貴志，米村耕平，大久保智生，久保直人（アドバイザー），山本木ノ実（アドバイザー）

さらにオープンキャンパスを同時開催するため，入試専門委員会から高橋尚志

〈準備委員会〉

実施専門委員会委員，瀬戸事務長補佐，田中総務係長，大麻学務係長

〈実施委員会〉

新見学部長，実施専門委員会委員，各コース・領域から選出された教員，講座を担当する教員

間島事務長，瀬戸事務長補佐を始め事務職員，教務職員